

工学的人間

(I)

田中 希生

June 23, 2021

● 自然とは何か？

- ・ 自然 = 本性 nature
- ・ 自然 = 対象 object (人間に対置されてあるもの)
 - 人間の表皮を境にして、一方に精神や主体 subject の名を与え、他方に自然の名を与える。
- ・ 自然 = 荒々しいもの (英語で私生児を natural son という)
 - われら私生児は自然の本能が人目を忍んで燃え上がるときにつくられ、強い肉体と気力とを授かる。
 - 気怠く退屈な寢床で生まれたばかどもとはできがちがう。

シェークスピア『リア王』

- ・ ホップズヤルソーの「自然状態」……万人による万人の闘争／社会性なき、自由な自然人の世界
- ・ マルクスの「自然史」……歴史の最終審級。

【問い】

……………では、近代日本の自然とは？

● 道——近世社会の最終審級

近世社会において、自然はもっとも重要な概念ではなく、《道》。安政5（1858）年、かの大獄を控えた江戸の不穏な情勢を主君島津斉彬に伝えるため、中山道を通して急遽薩摩へ帰還中だった鎌田正純は、日記に次のような一節を残している。

◎ 八月八日、晴天、戌、

一今日道明之筈候処一昨夜之雨二而又々相損通路無之、……

中山道上州にて川支、八日道支八日の滞り二逢、公の急きある身にしあれと、天災力ニ及八ね八災せん憂せき八吾身を玉に成すの理りとやと思ひ侍りて

愚なる身をさへ玉に磨けとや

かく天地の戒しむるらむ

事と理りと八二ツなき訳を

理りの外にありてふ道もなし

ミちより更に又事もなし

(『鎌田正純日記』安政5（1858）年8月8日条)

→ 豪雨による通路留めに苦しみつつ、「理」と「事」とを包括する「道」について語る。

- われわれが自然概念にカテゴライズする天災にせよ、社会概念にカテゴライズする公務にせよ、それらはいずれも「道」において生じるという点で、一体のものとみなされている。
- 近世のひとびとが関心を示したのは、「理」（「知」）と「事」（「行」）とを一致させる「道」。

【伊藤仁斎の道】

道はなお路のごとし。人の往来するゆえんなり。故に陰陽こもごも運る、これを天道と謂う。剛柔相須うる、これを地道と謂う。仁義相行なわるる、これを人道と謂う

『語孟字義』

- 道＝路。「人物各々其性ノ自然ニ^{シタガ}循へバ、則チ其日用事物之間、各々当ニ行フベキノ^{ミチ}路有ラザルナシ」（『中庸章句』）とする朱熹と、仁斎の「道」理解は同じ。

学問の法、予岐つて二と為す。曰く血脈、曰く意味。血脈は、聖賢道統の指を謂ふ。孟子の所謂る仁義の説の若き、是れなり。意味とは、即ち聖賢書中の意味、是れなり。蓋し意味はもと血脈の中より来る。故に学者当に先ず血脈を理会すべし。若し血脈を理会せざるときは、則ち猶ほ船の舵無く、宵の燭無きがごとく、茫として其の底り止まる所を知らず。然れども先後を論ずるときは、即ち血脈を先とし、難易を論ずるときは、則ち意味を難しとす。何ぞなれば、血脈は猶ほ一条路のごとし。既に其の路程を得るときは、則ち千万里の遠きも、亦た此より致る可し。

『語孟字義』

- 意味……理・徳（個人、現代に備わる。）
- 血脈……道（世代を超え、歴史的に形成される客観的指標。「血脈は猶ほ一条路のごとし」。）
- 人為的な道徳と自然の路地とが混濁した形になっている、とはいえる。

【荻生徂徠の道】

生民より以来、物あれば名あり。名は故より常人の名づくる者あり。これ物の形ある者に名づくるのみ。物の形なき者に至ては、すなはち常人の^み睹ること能はざる所の者にして、聖人これを立ててこれに名づく。

『弁名』

- 常人は名のあるところに物を、物のあるところに名を想定する。だが聖人は、物のない場所にも名を与えることができる。聖人は超感覚的な世界を見ることなく見ている。

先王（聖人）の道は、先王の造る所なり。天地自然の道に非ざるなり。

『弁道』

- 「道」もまた、「徳」や「仁」などと同様、物的な論理のはたらく現実の世界にその足場をもたない。「道」とは純粋な観念、実在的というよりフィクショナルな制作物。
- 裏を返せば、聖人は肉体的な「血脈」の起点というより、もっぱらフィクションの制作者。
- 「道」は事物の論理から切り離され、明確に精神の所産となった。「道」の社会的決定権は、人為的＝虚構的なもの。徂徠によって、道徳と自然とが明確に区別された。

● 自然概念の発生と展開

徂徠の自然観は、西欧的なものとも合致しうる。だが、近代日本において、現実には、しかも独特な形で一貫して作動していたのは、徂徠の語る「自然」ではなかった。

夫レ精神作力が脳髓ノ機能タルハ精神病学ニ於テモ生理学ニ於テモ近時大ニ興リタル自然哲学ニ於テモ其証例ノ極メテ牢確ナルコトナリ而シテ面貌動作ノ精神作力ト連絡アルコト亦以上縷述セル所ノ如シ果シテ然ラバ則チ精神ト身体トノ必相須ヲ説クモ誰カ其不可ヲ称スルモノアランヤ誰カ敢テ其説ヲ間然スルモノアランヤ而レドモ身体一般ト精神トノ関係ヲ説クノ緊切ナルハ脳髓ト精神トノ関係ヲ説クノ緊切ナルニ若カズ而シテ脳髓モ亦身体ノ一局部タルモノナレハ誰カ能ク「脳髓ト精神ト相須ツノ理ヲ説クハ身体ト精神ト相ヒ須ツノ理ヲ説クニアラズ」ト云ハン

呉秀三『精神啓微 脳髓生理』

- 「面貌動作」と「精神作力」の「連絡」を根拠に、精神の作用が脳髓の機能にすぎないことを強調。精神＝肉体の一種。

精神作力ノ機関タル者ハ脳髓ナリ精神作力ハ即チ脳髓ノ機能ノミ生体现象ノ一ニ過ギザルナリ呼吸ノ肺管ニ於ケル消化ノ胃腸ニ於ケル血行ノ心臓脈管ニ於ケルト何ゾ別タン……。

『精神啓微 脳髓生理』

- 脳髓のおこなう精神作用とは、肺のする呼吸と変わるものではない。
- 近世における道と路とのあいだに繰り広げられた二元論を、物体の側に統一しようとする峻烈な態度。
- では、精神と肉体とは、どのように区別されるのか？

感触ハ天然ノ発表ト自然ノ言語トヲ有スルモノニシテ吾人ノ感動ハ夥多ナリト雖モ之ヲ特表スルノ現象ハ一定不変ナリ……各種ノ感触ハ各種ノ面貌ヲ呈シ各種ノ感触ハ各種ノ筋動ヲ起シ感触ノ甚シキモノハ発シテ声音トナリ腺機ノ分泌トナリ(汗 涙 ヒ涙落ツ)全身ノ潑動トナル其発表ノ大小強弱一モ其感触ノ緩急劇易ニヨラザルコトナシ

『精神啓微 脳髓生理』

- 感触は「天然」の「発表」と、「自然」の「言語」とに区別。
- 天然の発表……顔の表情や筋肉の動きにつながる。(いわば外なる自然。)
- 自然の言語……声や涙、汗につながる。(いわば強い発表。内なる自然。)
- 呉が批判(度外視)するのは、内部にとどまって外界との通路をもたない自意識。

Cf. 福沢諭吉『文明論之概略』

智恵と徳義とは、あたかも人の心を両断して、各その一方を支配するものなれば、いずれを重しと為しいずれを軽しと為すの理なし。二者を兼備するにあらざれば、これを十全の人類というべからず。然るに古来、学者の論ずる所を見れば、十に八、九は、徳義の一方を主張して事実を誤り、その誤の大なるに至て

は、全く智恵の事を無用なりとする者なきにあらず。世の為に最も患^{うれ}うべき弊害……。

→ 福沢は「徳義」よりも「知恵」を重視。呉との共通点。

- 徳義「徳義は一人心の内にあるものにて、他に示すための働にあらず。修身といひ、慎独といひ、皆外物に関係なきものなり」。「結局、外に見わるる働よりも内に存するものを徳義と名^{なづ}くのみにて、西洋の語にていえばパッシーウとて、我より働くにはあらずして、物に対して受身の姿と為り、ただ私心を放解するの一事を以て、要領と為すが如し」。
- 知恵「知恵は人に伝わるること速にしてその及ぶ所広し、……智恵の働は日に進て際限あることなし、……人の智恵を糺すに試験の法あり、……智恵は一度びこれを得て失うことなし、智恵は互に依頼してその機能を顕わすものなり……」。

Cf. 福沢『通俗道徳論』

少しづつにても人情に数理を調合して社会全体の進歩を待つの外ある可らず。

→ 精神に数理＝智を調合。別言すれば、精神に天然／自然を調合。それが文明。

人の精神の発達するは限あることなし、造化の仕掛には定則あらざるはなし。無限の精神を以て有定の理を窮め、遂には有形無形の別なく、天地間の事物を悉皆人の精神の内に包羅して洩すものなきに至るべし。この一段に至ては、何ぞまた区々の智徳を弁じてその界を争うに足らん。あたかも人天並立の有様なり。天下後世、必ずその日あるべし。

『文明論之概略』

- 精神と天地（造化）とは融合できる。なぜなら、究極的には同じものだから。
- 「造化」は当時 nature の訳語としてたびたび採用されていたもの（使用例、西周・坪内逍遙ら）。明治期に訳語として多かったのは、「天然」（西周・夏目漱石ら）。
- ともあれ、重要なのは次の点。

「天然」（呉）＝「造化」ないし「天」（福沢）

「自然」（呉）＝「精神」ないし「人」（福沢）

- 西欧文明・西欧自然科学に対する、明治期の知識人たちの極端な信頼が、nature の訳語として、かえって「天然」よりも「自然」を選ぶ結果を招くという逆説をみた。本来の語感からいえば、内部よりも外部、自己よりも他者に属する「天然」のほうが、nature の意味にふさわしかったはず。しかし、「天然」の語はそのおよぶ範囲を狭めてしまい、いまではずっと限定された場面で用いられる語に変わっている。かわって、自己を含む「自然」の語が、nature の意味を占拠。

→ 重要なことは、nature に精神が包摂されることにより、かえって精神が外界を闊歩するようになったこと。この事態は、近代日本の自然概念の歴史上、特異な状況をもたらした。というのも、この概念は、より精神的な内容をあつかうとみえる文学上の課題として、作家の世界においておそらくもっとも先鋭的な社会問題を提供したから。

● 純文学者の自然概念

当時、一般には〔文学上の〕自然主義と社会主義とをほとんど同じもののように誤解していた。

佐藤春夫『詩文半世紀』

明治四十年から四十二三年にわたる間の自然主義運動の猛烈であつたことは、今更こゝにそれをくり返すまでもない。自然主義といふ言葉は何処でも彼処でも言はれた。変な意味にさへ用ゐられた。否、そればかりではなかつた、その尖つた方面は、飽までも実行とつゞいてゐたために一今までのやうに単なる小説の運動ではなしに、社会運動と相連接した形が歴然としてその上にあらはれてゐたがために、後には政府の注意をも惹くやうになつて、不健全な、不道德な、危険な思想であるやうに考へられて行つた。例のほんの芽であつた幸徳秋水等の社会運動とつゞいて行つてゐるやうにさへ思はれた。

田山花袋『近代の小説』

僕は藤村の詩を抱きしめたまゝ、平民社の社会主義運動に趨つたが、そこに少しの撞著も感じなかつた。……なぜ、藤村の詩と小説とは僕の社会的思弁とあんなにたやすくあんなにきれいに融合することが出来たのであろうか。

白柳秀湖「藤村氏の詩及び小説と初期の社会主義運動」

- もちろん誤解だが、非現実ではない。福沢諭吉以来の、日本の「自然」概念の独自の成立過程からいって、むしろ正当な範囲の論理的必然性をもっているといえる。
- 精神＝身体的言説の可能な発展形態としての、文学＝政治運動。
- では、社会主義者はどのように「自然」を使用していたか。

即ち私共が革命というのは、甲の主権者が乙の主権者に代るとか、丙の優良な個人若くば党派が、丁の個人若くば党派に代つて、政権を握るというのではなく、旧来の制度組織が朽腐衰弊の極、崩壊し去つて、新たな社会組織が起り来るの作用をいうので、社会進化の過程の大段落を表示する言葉です、故に厳正な意味に於ては、革命は自然に起り来る者で、一個人や一党派で起し得る者ではありません。

幸徳秋水「獄中から三弁護人宛の陳弁書」

- 問題になっていたのは、彼らの主張していたアナーキズムの標榜する「直接行動」の概念。一般的にはストライキや小作争議などの団体行動を指すが、暗黙に、暴力をともし革命が射程に入ったもの。
- それに対して彼の弁明は、「自然に起り来る」という点にある。だが、この「自然」がなぜ「直接行動」とつながるのか、この一点において、彼の弁明は不明瞭。

人間が活物、社会が活物で常に変動進歩して已まざる以上は、万古不易の制度組織はあるべき筈はない、必ずや時と共に進歩改新せられねばならぬ、其進歩改新の小段落が改良或は改革で、大段落が革命と名け

られるので、我々は此社会の枯死衰亡を防ぐためには常に新主義新思想を鼓吹すること、即ち革命運動の必要があると信ずるのです。

幸徳秋水「獄中から三弁護人宛の陳弁書」

- 革命運動＝「新主義新思想を鼓吹すること」。つまり革命運動とは言語上の運動。
- 言語にもとづく革命運動という主体的な活動は、一方で直接行動であり、なおかつ「自然に起り来る者」。
- 現代人の「自然」観念に馴染んだわれわれからは、この事件で彼が検挙されたのは国家のフレームアップにしかみえないが、彼らの使用する概念の水準から丹念に追っていけば、そうした紋切り型の国家・社会の二元論的な理解・暗黙の階級闘争史観では尽せない。

非常のこととは感じないで、なんだか自然の成行のやうに思はれる。

幸徳秋水「死刑の前（腹案）」＊死刑を前に面会に訪れた堺利彦の言葉。

死刑！ 私には、^{まこ}洵とに自然の成行である。これで可いのである。兼ての覚悟あるべき筈である。私に取っては、世に在る人々の思うが如く、忌はしい物でも、恐ろしい物でも、何でもない。

幸徳秋水「死刑の前（腹案）」

- 「私」の政治的行為と自然の成行とが矛盾なしに結びつくような言語使用。
- 彼の言い分を素直に受け取るなら、直接行動とは、ひとがその語に感じるような物理的な暴力をとまなうものではなく、もっぱら言語上の運動にすぎないが、にもかかわらずそれは革命運動であり、しかも主体的な運動であるにもかかわらず、また「直接」という語の意味にもかかわらず、同時に「自然に起り来る」ことを意味できる。また「自然に起り来る」にもかかわらず、彼が革命の首謀者であることにはかわりなく、したがって、死刑は「自然の成行」である……。
- 「私」と「自然」が結びつく、非常に複雑で独特な使用法。
- 日本の近代文学史上の画期である「自然主義文学」は、同時に「私小説」だったことを、あわせて考えてみよう。